



Title	季の歌と恋の歌のあいだ
Author(s)	佐藤, 明浩
Citation	大阪大学古代・中世文学研究会会報. 1985, 1, p. 5-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67227
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

季子の歌と恋の歌のあいだ

佐藤 明浩

昨年度から、「式子内親王集」を、原則として週一回、毎回数首ずつのペースで読んでいる。二、三人で始めた勉強会であったが、現在では院生・学部生合わせて七人が参加している。テキストには、神作光一編「式子内親王」(武蔵野書院)を使用。まづ、テキスト中の影印「本を読み合わせて本文を検討することから始め、できるだけ当時の語法に忠実に解釈することを目指している。また、本歌・典拠、その他各人気づいたことを指摘し、意見を交換しながら、一首一首読み進んでいる。冒頭の百首歌から始めて、昨年度中にそれを終え、現在二番目の百首歌中秋の歌を読んでいるところである。

その秋の歌の中に、恋の歌としても解釈が成り立つのではないかと思われるものがあつたので、ここでは「さ」が初句「あけぬなり」を直接受けつい

に一部紹介したい。

あけぬなりさぞとおもふに秋にそむ心の色のまづかはるらん(一三六)

一夏の最後の夜が明けたらしい。そうだ立秋の朝を迎えたのだと思うと、木の葉よりも何よりもまず最初に、秋に染まる心の色が変わるのだろう。(目に映るもの、耳にするもの、すべて秋のものとして感じられるよ。)

秋の第一首目、「立秋」の歌である。「さぞとおもふに」は、日本古典文学大系「平安鎌倉私家集」では「さぞすべてのものが変わってしまうのだろうと思うに」と解している。その他、「さぞ木の葉ももみじして色づいたであろうと思ったが」と解釈する案も出された。しかし、ここでは「さぞ」を副詞とみて「さぞ……と下にことばを補って考えるよりも、「さ」が初句「あけぬなり」を直接受けつい

ると考えて「夜が明けて立秋の朝を迎えたのだと思う」と解するほうが自然であろう。さて、この歌は、立秋の朝、つれない恋人に贈つた歌として読むことができるのではないか。「秋」に「飽き」を掛けていると考へて、「季節は秋になつた。あなたは私に飽きてしまつて、その心がますます移つていることでしょう」と下句を解釈する。

庭の苔軒のしのぶはふかれれど秋のやどりに成

にけるかな

(一三七)

「庭の苔、軒下に生えたしのぶ草は、緑の色が濃く、おおい茂つていてるけれども、そこにも秋がやつてきて宿をかるようになつたのだなあ。この荒れた仮りの住居にも秋がやつてきたよ。」この「あけぬなり」の歌に続く「秋」の第二首目。「庭の苔」「軒のしのぶ」が深いといふのは、秋らしくない、まだ夏のような状態であることを示すのである。と同時に、荒れたさびしげな家を描写していくと考えられる。

障子のゑに、あれたらるやどにもみぢぢりたる所をよめる

俊頼朝臣

故郷は散るもみぢばにうづもれて軒のしのぶに
秋風ぞふく(新古今集・秋下・五三三)
でも、「あれたらるやど」を「のきのしのぶ」によつて描写している。また、

やへむぐらしげれる宿のさびしきに人こそ見え
ね秋はきにけり(拾遺集・秋・一四〇・惠慶)
という歌が想起される。あるいは、作者の念頭にこの恋歌があつたのかも知れない。この歌も恋歌として読むことが可能である。

「庭

の苔」「軒のしのぶ」が自らの恋心を暗示し、ここでも前の歌と同じように「秋」に「飽き」を掛けていると考える。即ち、「苔もすほど長い間」人目をしのんで、私はあなたのことを深く思い続けてきました。それなのに、あなたは私に飽きてしまつたのですね。私は飽きが宿るそのところとなつてしまひました」と、裏の意味を解釈するのである。

以上は、先日の勉強会で出された意見をまとめたものである。当座の思いつきによる部分もあって、取り上げた二首に恋の情調を読みとったとしても、あながち見当はずれではあるまい。新古今時代には、一首に恋の情感を漂わせた季の歌が多く詠まれた。それは、一首の美的世界を構築するための、ひとつのかかわるものと考えられる。「あけぬなり」「庭の苔」の両首も、そこに恋の気分がこめられているとすると、そうした方法が獲得され洗練されていく過程の上に位置づけられてしかるべきであろう。

(大学院博士前期課程)